

西原方言の形容詞の意味論的研究(1)

名嘉真, 三成

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

190

(終了ページ / End Page)

197

(発行年 / Year)

1995-02-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012663>

西原方言の形容詞の意味論的研究(1)

名嘉真 三 成

0. はじめに

国語の属性や感情を表す形容詞「美しい」、形容動詞「きれいだ」などの意味に似た語には、西原方言では「アハラギカン」(aharagikan)、「カギカン」(kagikan)、「キチギカン」(kitsigikan)、「ジミギカン」(dzimigikan) の四語が現れる⁽¹⁾。これらの語は類義語として意味が酷似しており、例えば「美しい(きれいな)女」を表す名詞句限定用法では

- 1 a アハラギミドゥン
- b カギミドゥン
- c キチギミドゥン
- d ジミギミドゥン

のように用いられ、いずれの語もグラマティカルにミドゥン(女)を修飾することができる。しかしこれらの語の意味はそれぞれ異なるものと考えられ、はたしてどのような意義特徴を有するのか、検討を要する。また国語の「美しい」と「きれい」は、前者が〈対象が純粹かつ清らかで人の心を打つ状態〉であるのに対し、後者は〈不純かつ余分なものがなく全体が完い整った状態〉という意義特徴を持つが⁽²⁾、この二語と西原方言の上の四語がどのような意味領域を共有するのも大いに興味あることである。

以上の観点から、ここでは問題の四語について意味分析を行い、論述する。

1. 語の成り立ち

意味分析の前に、まず理解を容易にするため、これらの語が国語のどの語に対応するのか、その源について触れておく。

「アハラギ」は音韻法則上感動詞「アハレ」を含む語である。恐らく、

*apare (アハレ) + *kai (気) → apareke → aparege → aharagi

と変化したであろう。意義上「アハレ」は〈愛惜や悲しみ〉以外に、元来〈賞美や讃嘆〉の気持ちを表す意味特徴を持っていた。例えば、

ほととぎす鳴きて行くなりあはれその鳥 (万 1756)

あなあはれ、布当の原、いと貴、大宮処 (万 1050)

などの例は〈賞美や讃嘆〉の意味を示す。西原方言の「アハラギ」もこの古い意義特徴を保持するが、後述のとおり対象が限定される点に特色がある⁽³⁾。

「カギ」は国語の「影」に対応する。影は元々〈明暗〉ともに用いられ、〈光〉や〈威光〉などの意味も有していた。西原方言の「カギ」は、これらの意味が拡張されて、立派なとか美しい・きれいとかの意味を表すようになったと思われる。

「キチギ」は、国語の形容詞「きつし」と関係する語であろう。「きつし」は〈きびしい・酷である〉との意味の他に、〈えらい・素晴らしい〉の意味を持つ。西原では後者の意味が保持され、後に美しい・きれいの意味に用いられたのであろう。恐らく

*kitu (きつ) + *kai (気) → kituke → kituge → kitsĩgi

の変化を経たと思われる。なお、「きつい仕事」と言う時の「きつい」の意味には、西原ではクーカンku:kanを用いる。クーシカマ(きつい仕事)のように。

最後の「ジミギ」は未詳語である。『混効験集』や『おもろさうし辞典総索引』などにも対応しそうな語はない。ただし、『日本方言大辞典』に「じみ」や「ずみ」の見出し語があり、宮城県方言では〈丈夫・壮健・達者〉の意味を表すという⁽⁴⁾。西原の「ジミギ」のギは「アハラギ」「キチギ」など同じく、形容詞をつくる接尾辞ge(気と同根)に対応するから、ジミは音韻法則から上の「じみ」や「ずみ」に対応すると考えられる。恐らく、意味の拡張により後述のような〈立派な〉〈壮麗な〉などの意味を獲得したのであろう。

2. 意味分析

さて、以下に例の四語の意味分析を行い、意義特徴を明らかにする。

これらの形容詞がどのような対象と結びつくかに注目すると、まず視覚的なものでは次の語と結びついて用いられる。

ア. 「美しい(きれいな)人」

2 a アハラギビトゥ

b カギビトゥ

c キチギビトゥ

d ジミギビトゥ

「人」のことはヒトゥçituと言う。上の例は連濁によりビトゥになっているが、この場合男性でも女性でも容姿または容貌がよければ四語とも用いられる。ただし、アハラギは容貌のみに使用され、姿や格好を示す語に用いない点は他の三語と異なる。即ち、結論を言えば

2 a は〈容貌が美麗で、人の心を打つ状態〉の人を意味する。従って、

3 ミハナヌ アハラギカン《顔が美しい(きれいだ)》

のように、ミハナ《顔》(目鼻の複合語)を対象語にとれるものの、

4 ×ドゥーヌカタチヌ アハラギカン《スタイルが美しい(きれいだ)》

5 ×アハラギタイカク《美しい(きれいな)体格》

など「スタイル」や「体格」の語とは結びつかない。また、

6×ミーヌ アハラギカン《目が美しい（きれいだ）》

7×カタヌ アハラギカン《絵が美しい（きれいだ）》

のとおり、顔の一部分や人以外を示す語とも結合しない。

これに対し、他の三語はいろいろな対象語をとることが出来る。

イ。「美しい（きれいな）花を捧げる」

8 a×アハラギハナウ シィキイ

b カギハナウ シィキイ

c キチィギハナウ シィキイ

d ジィミギハナウ シィキイ

ウ。「美しく（きれいに）字を書く」

9 a×アハラギン ジィーユ カチィ

b カギーチャ ジィーユ カチィ

c キチィギン ジィーユ カチィ

d ジィミギン ジィーユ カチィ

エ。「美しい（きれいな）目の女」

10 a×アハラギミーヌ ミドゥン

b カギミーヌ ミドゥン

c キチィギミーヌ ミドゥン

d ジィミギミーヌ ミドゥン

オ。「美しい（きれいな）体操」

11 a×アハラギタイソー

b カギタイソー

c キチィギタイソー

d ジィミギタイソー

カ。「美しい（きれいな）眺め」

12 a×アハラギナガミ

b カギナガミ

c キチィギナガミ

d ジィミギナガミ

この三語のうち、ジィミギは多少ユニークである。例えば、11 d・12 dのジィミギ「体操・眺め」は、いずれもダイナミックで雄大な様子の体操や眺めを示しており、同じ美しさ（きれいさ）でも〈壮麗な〉という意義特徴を持つ。10 dのジィミギ「目」は彫り深く秀麗でかつ大きな目を意味し、9 dに関連してジィミギ「字」も太く遅しい泰然とした美的な字

を表す。このことは、

13×ジイミギミッジュ ヌン《きれいな水を飲む》

14×ジイミギクーキヌ ナガリイ《きれいな空気が流れる》

の例で、スケールの大きさやダイナミックさを問題としない「水」や「空気」にはジイミギを用いないことから支持される。そのジイミギもアハラギと同じく、美的で〈人の心を打つ状態〉を示すのだから、故にその意義素は〈壮麗で、人の心を打つ状態〉となる。

一方、カギとキチイギは、それぞれ国語の「美しい」と「きれい」の意味関係に酷似する。それは次の例からも理解できる。

キ、「美しい朝がやって来た」

15 a ×アハラギシイトウムティヌ ッタイ

b カギシイトウムティヌ ッタイ

c ×キチイギシイトウムティヌ ッタイ

d ×ジイミギシイトウムティヌ ッタイ

ク、「10は2できれいに割れる」

16 a ×ジューヤ ニーヒー アハラギン

バライドゥシイ

b ×ジューヤ ニーヒー カギーチャ

バライドゥシイ

c ジューヤ ニーヒー キチイギン

バライドゥシイ

d ×ジューヤ ニーヒー ジイミギン

バライドゥシイ

上の例で、15 b は〈清らかで美麗な状態〉の朝を表し、ク c は「きれい」の比喩的な表現であるが、余分なものがなくて〈全体が完全ですっきりと整っている状態〉を示すと言える。この意義特徴は精神的・観念的な対象語に話題を替えることによって、さらに明らかになる。

ケ、「美しい心を抱く」

17 a ×アハラギチイムー ムチイ

b カギチイムー ムチイ

c ×キチイギチイムー ムチイ

d ×ジイミギチイムー ムチイ

コ、「美しい教えで、心を磨く」

18 a ×アハラギナラーシイヒー チイムー

ミガフゥ

b カギナラーシイヒー チイムー

ミガフウ

c ×キチギナラシヒー チームー

ミガフウ

d ×ジミギナラーシヒー チームー

ミガフウ

サ.「きれいに身を引く」⁽⁵⁾

19 a ×アハラギン ミーユ ヒフウ

b ×カギーチャ ミーユ ヒフウ

c キチギン ミーユ ヒフウ

d ×ジミギン ミーユ ヒフウ

シ.「通知表にはきれいに5が並んでいる」

20 a ×ツーチヒョーンナ アハラギン ゴーヌ

ナラビー ウイ

b ×ツーチヒョーンナ カギーチャ ゴーヌ

ナラビー ウイ

c ツーチヒョーンナ キチギン ゴーヌ

ナラビー ウイ

d ×ツーチヒョーンナ ジミギン ゴーヌ

ナラビー ウイ

いわゆる17b・18bのように、精神的対象語には国語の「美しい」と対応してカギが用いられ、サ・シの用例のとおり、観念的対象語には「きれい」に対応してキチギを用いている。西原方言のカギとキチギは、それぞれ国語の「美しい」と「きれい」の意味領域を共有していることになる。

なお、聴覚的対象語の場合、次のように用いられる。

ス.「声が美しい(きれいだ)」

21 a ×クイヌ アハラギカン

b クイヌ カギカン

c クイヌ キチギカン

d クイヌ ジミギカン

セ.「美しい(きれいな)歌を歌う」

22 a ×アハラギアーゲー アイ

b カギアーゲー アイ

c キチギアーゲー アイ

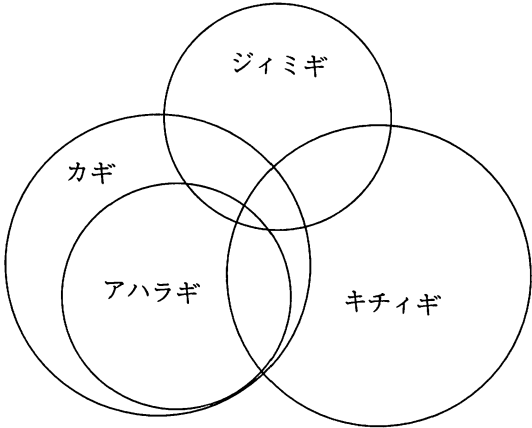
d ジミギアーゲー アイ

アハラギは前記のとおり人の〈容貌〉にのみ用いるから、ス・セの用例には現れない。これに対して、他の三語は使用可能だが、これまでの分析によって、例えば21 b・22 bは声の質やメロディーが〈美麗かつ清らかな〉声や歌を、21 c・22 cはそれが〈完全ですっきりと整った〉声や歌を、そして21 d・22 dは重厚で〈壮麗な〉声や歌を意味することになる。

以上のことから、四つの形容詞の意義素は次のようにまとめられる。

- 1) アハラギー 〈容貌が美麗で、人の心を打つ状態〉
- 2) カギー 〈美麗かつ清らかで、人の心を打つ状態〉
- 3) キチィギー 〈完全で、すっきりと整っている状態〉
- 4) ジィミギー 〈壮麗で、人の心を打つ状態〉

そして、これらの語の意味関係を図示すると、おおよそ次のとおりになる。



因に、対象語との共演関係をまとめて表示しよう⁽⁶⁾。

表1 視覚的対象語

形容詞 \ 対象語	人	女	顔	目	絵	花	字	色	眺め	体操	水	空気	朝
アハラギカン	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
カギカン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
キチィギカン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
ジィミギカン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×

表2 聴覚的対象語

形容詞 \ 対象語	声	歌	音楽	曲
アハラギカン	×	×	×	×
カギカン	○	○	○	○
キチィギカン	○	○	○	○
ジィミギカン	○	○	○	○

表3 精神的・観念的対象語

形容詞 \ 対象語	心	教え	思い	選挙
アハラギカン	×	×	×	×
カギカン	○	○	○	○
キチイギカン	×	×	×	○
ジイミギカン	×	×	×	×

3 おわりに

語の意味の研究は、困難なこともあって、遅々として進まなかった。語彙論の研究は、これまで語源や形態の面に重きが置かれていたのである。しかし恩師の中本先生は比較的早い段階から意味論（semantics）の研究に着手され、優れた業績を上げておられる。言語に内在する形式と意味の両面を隔てることなく論究することが、先生の持論だったのである。大学院の頃、先生に意味論についてご指導いただいたのは、大きな喜びである。なぜなら、語彙論の重要さと楽しさを知り、辞書の意味記述に微細な注意を払うようになったからである。今日、言語の研究はやはり先生の持論を通して、正しく究められるのだとつくづく感じる。

音韻論や文法論、ひいては意味論まで懇切丁寧にご指導下さった故中本正智先生に深くお礼を申し上げ、心からご冥福をお祈りする。

注

- (1) 宮古方言の形容詞は沖縄本島方言などと違って「クアリ活用」を示し、国語の「カリ活用」に似ている。四形容詞の語幹は、それぞれ「アハラギ」「カギ」「キチイギ」「ジイミギ」で、以下意味分析の際はこの形式を用いることもある。なお、西原方言の資料は筆者の内省による。
- (2) 国語の「美しい」と「きれい」の意義特徴については、『基礎日本語1』（森田 106～108ページ）を参照されたい。
- (3) 『おもろさうし』にも「あはれ」は現れるが、そこでは「立派な、あっぱれ」の意の美称辞として用いられている。
- (4) 『日本方言大辞典』上巻（小学館1111・1262ページ）を参照。
- (5) サの文例の場合、話者によっては19bの「カギーチャ ミーユ ヒフウ」が使える可能性があるるので、調査が必要である。
- (6) 表1の「水」と表3の「選挙」で、国語の「美しい」の意味にはほぼ対応する筈の「カギ」が用いられることは、違和感を与えるかも知れない。「カギ」が国語の「きれい」相当の「キチイギ」の意味領域を侵し始めているのだろうか。

なお、西原の「アハラギ」は〈容貌〉にのみ用いるが、下地町与那覇方言では「アバラギキン」《美しい着物》のように〈容貌〉以外にも用いると言う。話者は砂川恵知氏（明治30年生 与那覇217番地）。

主要参考文献

- 服部四郎 『言語学の方法』(1960 岩波書店)
国広哲弥 『意味論の方法』(1982 大修館書店)
中本正智 『日本列島言語史の研究』(1990 大修館書店)
森田良行 『基礎日本語1・2』(1977 角川書店)
柴田武編 『ことばの意味2』(1979 平凡社)
仲原善忠・外間守善 『おもろさうし辞典総索引』(1967 角川書店)
都立大学日本語研究会 『日本語研究』2号(1979 都立大日本語学研究室)
徳川宗賢監修 『日本方言大辞典』(1989 小学館)
上代語辞典編修委員会 『時代別国語大辞典』上代編(1967 三省堂)
名嘉真三成 『琉球方言の古層』(1991 第一書房)
日本大辞典刊行会 『日本国語大辞典』(1972 小学館)

沖縄の大綱引

